青年期における親への愛着と自律性の関係

- 授業場面における検討 -

丹羽 智 美

(名古屋大学大学院 教育発達科学研究科)

キーワード: 親への愛着, 自律性, 学業態度

Attachment to parents and academic autonomy in adolescence

Tomomi NIWA

(Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

Key words: attachment to parents, autonomy, academic attitudes

目 的

青年期は自律性欲求が高まる時期である。しかし、自律的に行動する際、思わぬ事態に直面する可能性が高いことから不安や恐怖を感じやすい。それをどれほど制御できるかが、自律的行動の内容を決定していくことになると考えられる。それらの規定要因の1つと考えられているのが親への愛着である。そこで本研究では青年が長時間従事し、自律性を求められる授業場面に着目し、そこでの自律的行動の内容と親への愛着がどのように関連しているのかを検討する。

方 法

調査時期; 2009 年 4 月上旬
調査協力者; 286 名(男性 182 名, 女性 102 名, 不明 2 名)
調査内容; (1)親への愛着尺度; 丹羽(2005)より, 愛着回避 9 項目, 愛着不安 8 項目からなる尺度を用いた。5 段階評定。
(2)自律性欲求; 安藤(2006)より, 「自己決定」8 項目, 「独立」7 項目からなる尺度を用いた。5 段階評定。
(3)自己効力感; 三好(2003)より 7 項目を用いた。5 段階評定。
(4)受講選択理由; 芳野・青柳(2000)を参考に 8 項目を作成した。5 段階評定。
(5)積極的授業態度; 授業場面において, 後で困らないようにする準備行動, 欠損部分のリカバリー行動について 11 項目を作成した。5 段階評定。

結 果

(1)各尺度の因子分析と内的整合性 自律性欲求, 自己効力感, 受講選択理由, 積極的授業態度の因子分析を行った。主因子法プロマックス回転を行い, それらの固有値と解釈可能性から, 自律性欲求は 2 因子, 自己効力感 は 1 因子, 受講選択理由は 2 因子, 積極的授業態度は 2 因子が妥当であると思われた。そして, 当該因子の因子負荷量が .40 以下の項目は削除し, 再度因子分析を行った。その結果, 自律性欲求は「独立」7 項目, 「自己決定」5 項目となった。受講選択理由は「友人との受講優先」4 項目, 「興味関心優先」3 項目となった。授業態度は「万全性」4 項目, 「不明点の放置」4 項目となった。

自律性欲求は「独立」が $\alpha=.75$, 「自己決定」が $\alpha=.68$ であった。自己効力感の α 係数は $\alpha=.85$ であった。受講選択理由は「友人との受講優先」が $\alpha=.80$, 「興味関心優先」が $\alpha=.64$ であった。積極的授業態度は「万全性」が $\alpha=.81$, 「不明点の放置」が $\alpha=.79$ であった。

(2)親への愛着と自律性欲求, 受講選択理由, 積極的授業態度との関連 親への愛着と自律性欲求, 自己効力感, 受講選択理由, 積極的授業態度との相関係数を算出した(Table1)。その結果, 愛着回避と有意な相関係数がみられたのは, 自律性欲求の「独立」($r=.17, p<.01$)と, 積極的授業態度の「不明点の放置」($r=.28, p<.001$)だった。また, 愛着不安と有意な相関係数がみられたのは, 自律性欲求の「自己決定」($r=-.21,$

$p<.001$), 自己効力感($r=.15, p<.05$), 授業態度の「万全性」($r=-.13, p<.05$)と「不明点の放置」($r=.13, p<.05$)だった。

Table1 親への愛着と自律性欲求, 自己効力感, 受講選択理由, 積極的授業態度との間の相関係数

		愛着回避	愛着不安
自律性欲求	独立	.17 **	-.04
	自己決定	.01	-.21 ***
自己効力感		-.01	-.15 *
受講選択理由	友人との受講優先	-.12	-.01
	興味関心優先	.00	-.08
積極的授業態度	万全性	-.05	-.13 *
	不明点の放置	.28 ***	.13 *

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

考 察

親への愛着回避が強くなると独立性が高くなったのは, 愛着回避の人の特徴をよく表した結果だと思われる。愛着回避の強い人は支援を求めても拒否された経験をもっているため, 親の有効性をあまり信じていない。これは般化し, 親だけでなく, 親以外の他者に対しても頼りにならないと思うようになるといわれている。そのため, 愛着回避は他者の意見に左右されにくい独立性と関連があったのだろう。そして, 愛着回避の強い人は支援を求めても拒否されることを予想して, 他者に頼らないような態度を取るようになる。そのため, リカバーするために支援を求めるべき状況でもそれをせず放置する, 不明点の放置と関連があったと考えられる。

親への愛着不安が強くなると自己決定が弱くなるのは, 自信のなさが影響していると思われる。愛着不安の高い人は自尊感情が低い(丹羽, 2005)。そのため, 自己決定し, その責任を負うことに不安があるのだと思われる。また, 愛着不安が強くなると自己効力感が低くなったのも同様のことが考えられる。自信がないため, 自分の行動がきちんと反映され結果が出るという信念を持ちにくいのだろう。このように, 愛着不安の強い人は動機づけを持ちにくい様子がみられる。そのため, 愛着不安の強くなるほど, 後に困らないように普段から準備する万全性が低くなり, 不明な点があっても放置してしまうのだろう。

引用文献

丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, 13, 156-169.